

## 看護研究支援の模索

宮本 孝一

### I. はじめに

実践と思考が影響しあい変化しながら推移した約1年間の状況を短くまとめてみます。なにか標準形が確立された図書館サービスがあって、どこかで作成されたガイドラインに則ってそのサービスを導入した…というタイプの実践ではありませんので、「なんだこれは？」と思われるかもしれません。

それは正しい感想で、実践知を集めて標準化し、各地の図書館・図書室で質のいいサービスが実現できるようなツール(ガイドラインなど)を共有財産化することは図書館全体のサービス向上には必要なことです。また、そうした図書館サービスの標準形と直接関係のない方向の追究にはリスクもあります。

ただ一方で「このままで、そのうち生計のたつような司書職が広く世間で確立・一般化するだろうか」「このままこの職場で司書でいつづけられるか」という図書館界で拡大しつづけている深刻な事態があり、この問題について「あたりまえの図書館サービスを確実に」「お手本に忠実」ということで近い将来なんとかかなという見通しをもつことは難しく感じられます。私見ですが、手詰まりとっていい状況に司書(あるいは司書志望の人たち)は直面しているのではないのでしょうか。

この閉塞状況の時代に、非常に単純素朴な小さな動機から出発し、方法論らしきものなものにもないまま「とにかくまず動き、動きながら考える。考えを実行し、ある種のサービスの確立

をめざす」という、ある意味お行儀の悪い発想と行動を司書のみなさんに提示することは、なにかしらの問題提起になるのではと考え、文章にしてみました。

藪ごぎのような模索の過程そのものの提示がテーマなので、マニュアル化ができそうな「うまくいく看護研究支援サービスのノウハウ」を期待する方には無益な内容となっています。そういうものが作ればいいとは考えますし、司書が誰でも使えるような授業案や教材の開発は、ある程度実現可能と思いますが。

### II. 老年学情報センター

私が非常勤職員(司書)として勤めている「老年学情報センター」は、東京都老人医療センター(以下、病院)と東京都老人総合研究所(以下、研究所)共用の医学図書館です。主に、医師や研究者が医学雑誌などを利用する場として機能しています。

病院と研究所は、もとは都の養育院に属する2施設でしたが、現在は、病院は都直営、研究所は財団、と経営が分かれています。

情報センターは、病院や研究所と同じ敷地にあります。母体施設とは別棟の建物となっています。情報センターのスタッフ4名は、非常勤職員・嘱託職員・委託社員で、正職員は配置されていません。以前は、都の正職員(司書)が2名配置されていましたが、数年前より、正職員不在の図書館となりました。

春先に、新年度の年間計画や業務分担について司書が話し合いをします。昨年度(平成17年度)の新規事業についても、司書(当時は非常

勤2名)で話し合いをもちました。

### Ⅲ. 新事業を考える

それ以前からアイデアは出していましたが、年間計画として組上にあげたのが「看護師対象の研修会の実施」です。

病院・研究所の正職員を合わせても、その過半数を占めるのは看護師です。しかし、看護師の利用は年間を通してほとんどありませんでした。看護雑誌も数タイトル購入していますが、来館する看護師はごく少数です。たまに来館する看護師の様子から、情報センターの開館時間・貸出手続き・文献取り寄せなど基本的なサービス内容もあまり知られていないことが伺われました。それどころか、この図書館の存在を知らない看護師も少なからずいる、という様子でした。そこで、看護師を情報センターの中に呼び集め、内部をみてもらい、利用方法を知ってもらう機会が必要と考えました。

もうひとつ「研修会の開催」に関わって情報センターの課題としてあげたことは、病院や研究所の年間の事業の流れに情報センターが位置づいていないということです。情報センターの1年は、母体施設の年間カレンダー（というものがもしあるとすれば）とはまったく関連性がありません。母体施設の年間の営みとまったく独立して存在する図書館です。また、建物が職員の動線上にないので、医療系職員や研究者、事務系職員が「通りかかる」ということすらなく、情報センターを利用目的とする常連の方々しか現われない図書館となっています。つまり、独立というより、病院や研究所の運営から「孤立」した図書館です。そこで、母体施設の年間事業計画に情報センターが位置づくような、母体施設と組織的に関わる催しを作りたいと考えました。

看護師の利用を促進することと、母体施設の年間事業運営の中へ情報センターの存在を根づかせるということ、この2つの課題が、看護師対象研修会というアイデアのベースです。とは

言っても、研修会の適切な時期・時間帯・内容など具体的なプランがあったわけではありません。また、この話をどこにもって行って、どういう手続きを経たら実施できるのか、なにもわかりません。とりあえず内容と時間と回数を考えました。実施可能な具体的な準備ができていなければ話のもっていきようがありません。

そこで考えたのが、情報センター利用ガイダンス・医中誌 Web の使い方、という、いかにも図書館的なテーマと、看護研究の抄録作成での Word の活用法です。Word を取り上げたのは、来館した看護師から Word の操作について何度か質問を受けたことがあったからでした。

Word の講習会に加えて、看護師の来館の機会を増やすものとして、Word や Excel、PowerPoint などの使用法の相談を受けるというサービスも打ち出すことにしました。この時点では、図書館利用教育としてのパソコン利用という考えはなく、図書館に看護師を呼ぶネタという程度の発想でしかありませんでした。「パソコン教室とパソコン個別相談」でしかなかったイメージは、その後、図書館や司書のありかたを再考する大きな切り口へと変化することになります。

まず、週1回1時間で数回開催する研修プログラムを考え、それを案内チラシの形に仕立てて、看護師長の集まる看護部の部屋に持ってきました。飛び込み営業です。そこで、具体的な日取りを決めてほしいと言われ、一気に開催の可能性が開けました。日程を組んで再度伺うと、看護教育担当の看護師長に看護師全体への宣伝と希望の取りまとめをしていただけたというお話があり、これでいよいよ実行可能となりました。

### Ⅳ. 講習会の開催と思考の変化

まずは6月後半に全5回の講習会を実施しました。講習会終了後、看護教育担当の看護師より「Excelでのデータ処理の講習もあるといい」と言われ、そうか、じゃあ、次はExcelだ…と、秋に全7回のExcel講習会を実施しました。看

護研究でのデータ処理について、Excel の機能を紹介するものです。「ああ、そうかじゃあ Excel…」ですので、それが司書の仕事なのか? という自問はそこにはありません。

しかしながら Excel 研修会の開催にむけてスライドやテキスト・実習用教材ファイルを作っていくうちに、「この内容はもはやパソコン教室ではない」ということがわかってきました。看護研究でのデータ処理ですから、Excel の機能の理解以前に基本的な統計知識の理解が必要です。標準偏差の意味を知らずに標準偏差を求める関数を知ってもそんな機能は使うはずがありません。そのため研修会の内容は「パソコン教室」ではなく「研究での統計処理講習会」の意味合いが強いのになります。この時点で「看護研究支援サービス」というイメージが芽生えました。しかしまだ、それが司書の仕事かどうかはわかりませんでした。

Excel 講習会の回を重ねていくうちに、看護師の来館が増えました。文献取り寄せの申し込み、端末での医中誌 Web の利用が増えたほか、看護研究グループの作業場としての利用、統計処理に関する個別相談、といった新しいタイプの来館利用者もでてきました。現在の利用状況を見ても「看護研究のグループ作業の場」という機能はだいぶ定着してきたと思われます。

個別相談への対応は、「セルの中で改行したい」「ここに線を引きたい」といった、いかにも Excel 相談ではなく、看護研究で集めた生データからどういう要素をどのように整理してどんな結論を出すかといった、研究の内容に立ち入った作業になります。それは自然に看護師といっしょに考える共同作業になります。個別相談に何度か対応して、どんなデータを集めてどんな解析をするのか、その結果から何を明らかにするのか、十分にビジョンが形成されていないことがわかりました。これは、研究初期の段階での先行研究調査（文献検索のポイント）の指導とも関わる問題です。これで看護研究の

年間の流れに沿った支援サービスの必要性を実感しました。「看護研究支援サービス」のイメージは、「絵に描いた餅」からさらに実体感のある「半立体的餅」になっていきます。

「Excel でのデータ処理の講習会を」の次の一撃(?)は、個別相談で寄せられた「検定というのは、どうやるのか?」という相談でした。有意の差があるとかないとかいう、あの検定です。そうか、じゃあ次は検定だ…と、準備をはじめ、年が明けて3月にカイ2乗検定、翌年(平成18年)の夏に、t検定の講習を実施しました。検定の講習を準備してわかったのは、Excel の一般事務的な機能と違って、一般向けに独学可能な内容で書かれた情報がほとんどないということです。書籍でもインターネットでもなかなか十分なものがない。看護研究の途中で看護師が泥縄式に数日勉強してどうこうするという次元の問題ではありません。ここで、看護研究支援サービスには「検定処理の人的サポート」が不可欠な要素であることがわかりました。絵に描いた餅は、また膨らみました。

現在(平成19年1月現在)は、看護研究の年間スケジュールに沿った新しいミニ研修会の年間計画を考えようとしています。その上で、看護研究のどの段階で情報センターのどんなサービスが利用できるのかを1年の流れで示すガイダンス、看護研究のテーマを見つける視点、先行研究を調べるポイントと医中誌 Web の操作、といった内容の講習会を、2月～4月に実施したいと思います。これらの取り組みで、看護研究スケジュールに密着した看護研究支援サービスは、二次元の紙面を離陸して立体的餅になっていくと想像しています。あとは餅をおいしくする工夫の問題です。これがまた難しいのですが。

## V. 情報の「収集」か「利用」か

「これは司書の仕事なのか」という自問は忘れてはませんが、脇に置くという姿勢で進んできました。しかし、それでも脳は勝手に自身

を納得させるリクツを考えつづけるもののように、図書館利用教育についてのいくつかの文章を読んだりもして、自分なりの回答は、だいたいまとまってきています。

まずは、情報の加工・表現・発信に関する指導はすでに図書館サービスの一環と認知されているという事実があります。大学図書館においてですが、Word で抄録作成、PowerPoint でスライド作成…といったことは図書館サービスの一部となっています。病院図書館（室）でも実態として多少は行われているはずですが。

さらに、看護研究への深い関わりは、「利用者グループのメンバーに混じった司書」という場面を生み出します。それは、「情報の収集をサポートする司書」という伝統的な司書観に合致した行動とはすこし異なる、「情報を集めて、それを実際に使って役立たせるところまでサポートする司書」というスタイルを、一部実現する場として作用する可能性があります。

いかなる情報も集めて終わりではありません。最終的に現実に役に立たなければ意味がない。しかもそれは実際にはなかなか難しいことです。そのせいか司書の専門職性の表現として、「情報収集・検索のプロ」という意味合いのコトバだけでは、なにか世間一般への説得力が足りないように感じます。図書館を経由しない情報入手の手段が拡大している現状や、いろいろな館種で司書のパートタイマー的雇用が拡大している現実と併せてみると、「情報収集・提供」という面だけで司書が一個の職業であるべきこと（それほどの専門性）をサービス対象者に実感してもらうのは、ますます困難な時代になっ

てきていると思われれます。そこで、「情報入手だけではなく情報活用全般の指導ができる司書」「研究メンバーの一員として行動する司書」といった事実を積極的に積み重ねていくことは、今後必要なことではないかと考えます。看護研究支援サービスという取り組みは、その場面になりうると考えます。病院図書館司書が看護研究支援サービスを確立する意味がそこにあります。

## VI. 非常勤がこんなことまで

この一連の取り組みについて「非常勤がこんなことまでして…」「安く使われているだけじゃないか」という感想をもった方もいらっしゃると思います。その人の個人的な実情に即して考える限り、それも現実的な正しい判断でしょう。ただし、不安定雇用の拡大という現状での司書職の確立について、これから何をしてどこに向かっていけばいいか？という、より普遍的な問題意識としては、何を考えているのかよくわからない意見でもあります。

看護研究支援サービスで司書職の状況が変わるという保証は当然どこにもないのですが、同時に、一般的な図書館サービスだけきちんとやっていけば自然に司書の仕事の状況が好転するなどという見通しをもつことも困難です。図書館の従来の仕事を確実に忠実にこなしていれば近い将来認められて…などということは、どんなエビデンスに基づけば説明可能でしょうか。その逆はたしかに真ではありますが。

「非常勤がこんなことまでして」…みなさんは、どうお考えになりますか。